

[シンポジウム報告 講演③]

みんなでつくる参加する東京2020

生涯スポーツ社会の実現へ向けて



帝京平成大健康医療スポーツ学部准教授

馬場 宏輝

帝京平成大学の馬場と申します。今日のスケジュールを見させていただいて、高橋さんの後にお話するっていうのも、覚悟しては来たんですけども、こんなにプレッシャーがかかるものかって。すみません。プレッシャーに負けました、完全に。私は40分なんです、30分、高橋さんに使っていただいたほうがいいかなと思うぐらいでしたけども、少しのお時間、お話させていただきたいなと思います。資料がお手元にあると思いますが、これは、もし、私の今日の話で興味があって、あれ、何だっけなと思うときに見ていただきたいものですので、今、この時間には必要はありません。前のスライドか、私の顔を見ながらお話を聞いていただければ十分です。

今日は、生涯スポーツ、生涯スポーツ社会という、いわゆる、パラの障害じゃないほうの、ライフロングのほうの生涯スポーツというテーマをいただいています。私、一応、体育、スポーツ経営学っていう学問を専門にしておりますけども、パラの障がい者スポーツも含めて、ライフロングの生涯スポーツもまだまだじゃないかという、私の問題意識も含めて、今日はそのテーマに沿って、お話をさせていただきますと思っています。

まず、私の原点、私の信条なんですけども、

これ、もう肖像権にいきなり引っかかります。これですね。約50年前の私なんですけども、50年前の馬場宏輝くんなんです。北国の田舎で生まれました。もちろん、カラーの写真がない時代です。この後、これ、自分で見ても、本当に田舎の子だなんて思います。私の信条は、スポーツで育った人は、スポーツのうまい人っていうのが、私の今の生き方というか、信条です。この後、衝撃的な、また、肖像権に引っかかる写真が出ます。

これが、すすすす育った小学校3年生の私です。当時、珍しいいわゆる肥満児。百貫デブってからかわれた子ども時代を過ごしまして。まず、体育の授業なんて大嫌いでした。体育、大嫌い。運動会はいつもビリだから、大嫌い。運動会の前日には、てるてる坊主逆さにつるして、明日絶対雨になれって行って、一度も雨になったことなかったですね。実は、そういう子ども時代を過ごしてました。

ところが、私には、スポーツとの幸運な出会いがありまして、私は、水泳を専門にしています。たまたま、水泳に出会いました。スポーツって楽しいんだなって、水泳以外のスポーツも、もっと楽しめるんだなっていうことに、気が付きました。北国の田舎だったの、室内プールではないんですけど、中学生

になったのときには県記録を持ってるぐらい上達しました。今日も、実は午前中、水泳の授業で、学生と外のプールで泳いでから来まして、ちょっとまだフラフラとしてるんですけど、という状況です。おかげさまで、私はスポーツとの幸運な出会いがありました。

あと、実はこう見えてスピードスケートもちょっとやっております、学生時代、インカレとか国体に出ました。今も、細々と続けてまして、大学を卒業した後、千葉県の選手団で、国体にも出場させていただきました。それから、これは、帝京平成大学って千葉キャンパスといいながら、実は市原市にありまして、市原市民スケート大会に2月に出て、選手3人のうち2位。頑張ったんですけど、2位に終わりました。今でも、こうやってスポーツをやらせていただいています。

最近、ちょっと流行りに乗って、ボルダリングやってみようぜって学生と一緒に、幕張のPEKIPEKIに行きました。よし登るぞっていった瞬間に、いきなり落ちるといふ、そんな感じです。大学のキャンパスの中にクライミングウォールがありまして、学生たちと、ちょっとやろうぜって行って、やっています。今、素人からすると、ちょっとだけ、おかげさまで、登れるようになりました。というように、いろんなスポーツを、今もやらせていただいているということ、ちょっと紹介いたしました。

生涯スポーツ、よく耳にする言葉ではあるんですけども、2000年にスポーツ振興基本計画という国が立てた計画では、国民の誰もが、ちょっとはしよりますけども、いつでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会の実現、を謳っています。背景には、1965年、ポール・ラングランという方が、生涯にわたって学習するということが大事だということ、を述べており、OECDでも1973年に、リカレント教育、生涯学習が大事だということが述べられ始めます。

ただ、日本ではどうかといいますと、1985年。中曽根康弘さんが首相の頃だと思いますが、臨時教育審議会で、生涯教育、生涯学習という言葉が出始めます。スポーツ界はどうかというと、1988年に、文部省のスポーツ課という部署が、生涯スポーツ課と競技スポーツ課に分かれまして、都道府県や市町村の自

治体でも生涯スポーツ課というような言葉が使われ始め、社会体育課から生涯スポーツ課という言葉に変わり始めたのが、この辺だと言われています。これが大体の時代背景です。

国のスポーツ環境の推移を、我々はいわゆるテキストベースで話をするときは、昭和20年代は鍛錬型のスポーツだと言います。30年代が競技型のスポーツ。40年代から、徐々に楽しめるようなプレー型になって、50年代が自己実現型。今は、自立社会貢献型のスポーツの関わり方じゃないかというふうに言われています。日本には日本の事情があると思います。『いだてん』大好きで、私も見ているんですけども、第2部に入りまして、田端さんが東京にオリンピック呼ぶんだって話をちょうどしているところですね。1920年頃の日本というのは、まだまだ女性がスポーツをすることは恥ずかしいとか、はしたないと言われており、名言がありまして、「女の体はスポーツに向いていない」って、当時の研究者、はっきり言ったんですよ。それが常識だった時代です。人見絹枝さんや前畑秀子さんが出てきて、日本の女性スポーツを引っ張っていただいた。これ、『いだてん』の名シーンですね。人見絹枝さん、当時100mの世界記録持っていて、もう、これから試合に出るっていうときに、新聞記者が、「あなたには今、全国民の期待がかかっています」って試合前に言うんですね。それでは全力出せるわけじゃないなって思うんですけども、プレッシャーに負けて4位。周囲はメダルを逃したって言うんですよ。それで、ワンワン泣いて。「このままじゃ帰れない」と思い「男は負けても帰れるかもしれないけど、女は負けたら帰れない」と言うんですね。すごいこと言うなと思うんですよ。それで、自分がやったことない800mに出場して、見事、日本人女性初の銀メダルを取るという。そういう話題が、ちょうど放映されたところでした。

我々が授業で使ういろんなテキスト見ていくと、大正、昭和の頃の学校体育っていうのは、こういうものだというふうで紹介されます。よく出てくる青年体操です。肋木使ったものだからってというのが、出てきます。こんなものが、よく出てきます。そして昭和39年に東京オリンピックが開催されます。オリンピック、開会式の様子ですよ。いわゆる、

女性も活躍をする場が出てきましたが、まだまだ、競技スポーツの場ですよね。競技スポーツで活躍する女性が出てきた時代だということだと思います。

実は、オリンピックの創始者といわれるピエール・ド・クーベルタン。このクーベルタンは自分がオリンピックを作ったときに、「大衆の面前で女性の競技を見せることは、品位を下げる」ってクーベルタンは言ったんですよ。なので、オリンピックが始まった頃の競技には、女性は、ほとんど参加していないという状況だったんですよ。クーベルタンがやってる頃。ただ、これには背景がありまして、今、私たちが近代スポーツっていうのは、実は、やんちゃな男の子の教育手段として、イギリスのパブリックスクールで制度化されたっていう背景があり、やんちゃなエネルギーがあふれる男の子たちに、けんかして何かするんじゃないかって、ルールを決めて、この時間内で、この場所で戦ってみろって、そういうところが制度化されてるんで、女の子がするってことが、想定されていないんですよ。もともと。だから、当時からするとしょうがなかったのかもしれないですね。現代においても、生涯スポーツって言われますけど、実は、スポーツが得意な人の生涯スポーツだったり、スポーツをしている人の生涯スポーツじゃないかなっていうふうに感じます。これだと、真の生涯スポーツとはいえないというふうに、私は、感じています。

2011年に「スポーツ基本法」という法律が改正されまして、そこでは、スポーツは世界共通の人類の文化だというふうに謳われています。改めて文化と言わないと、文化と認めてもらえないっていう現象です。我々スポーツ人は、スポーツは文化だと言うんです。だって、学校の部活にも運動部と文化部があるから、運動は文化部じゃないよねっていまだに言われます。我々からすると、スポーツは文化です。しかも、全ての人々の権利だというふうに、法律に書かれていますので、これは、男性、女性を問わず、障害のある方、ない方、子どもから高齢者まで、誰でもスポーツができる、そういう世の中にしなきゃいけないということが、法律で定められているということも、ぜひ、知っていただきたいなというふうに思います。

今日、出てきた話題で、今まではオリンピック、東京オリンピックですね。いわゆるオリンピック。東京オリンピックとは別に、東京パラリンピックという言い方をずっとしてきました。今は、ようやく、オリンピック・パラリンピックっていうのは、並んで一つの単語として使われるようになりました。これも、法律が変わって、スポーツ庁が管轄するようになって、オリ・パラっていうのは、必ずセットで使われるっていうことです。だから、私もいろんな所へ呼ばれて、2020オリンピックに向けてみたいなテーマいただくと、「オリ・パラにしてください」っていうふうに、私も言うようにしています。

これ、よかった。このエピソード出てたら使えないなと思ったんですけど。パラリンピックの選手団が着用するユニホームが、オリンピックの選手と一緒にしたのは、実は、1988年、長野大会からなんですよ。同年代ですけど、清水君、メダル取りました。実は、アイスレジャの土屋さんかな。土屋さんも、このような同じようなユニホーム着てるんですよ。表彰式の写真も、こんな感じです。長野のエムウェーブ。実は、これも、今の我々、当たり前ではあるんですけど、長野で初めてこれが実現したっていう、ものすごい大きな話題だったというふうに記憶しています。

それから、2012年のスポーツ基本計画には、税金を使って国のスポーツ振興をどうしていくかっていう、具体的にライフステージに応じたスポーツ活動を推進するっていうことが明記されています。その中で、国民の誰もがそれぞれの体力や年齢、技術、興味、目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでも安全にスポーツに親しむことができる、生涯スポーツ社会の実現に向けた環境の整備を推進するというふうに謳っています。これは、ライフロングという意味での生涯スポーツ社会ですけども、もちろん、障害のある人も含めた、生涯スポーツ社会ということですね。いつでも、どこでも、いつまでもですからね。

国民の運動スポーツ実施状況はどうかというと、55.1%とありますが、これは、成人の週1回以上のスポーツ実施率なんですよ。成人、20歳以上の方の、週1回のスポーツ実施率が55%。2人に1人ぐらいです。週2日お休みがあるとして、1日、何かちょっと体を動か

す人が2人に1人。これは、どうですかね。感覚的に、多いですかね。少ないですかね。どうですか。今、この場で、もし、週1回以上、体を動かしている方って言ったときに、半分ぐらいの方が手が挙がれば、いいんですが、どうですかね。学生によく、授業で聞くんですよ。自分の家族。自分だと、部活やってますになるんで、「自分の家族で考えてごらん。家族全員の中で、週1回以上、体動かしている人は、何人いる」って。「何%になる」って聞くと、「6人いて3人」って言うんですよ。「その3人、誰」って言うと、「僕とおじいちゃんとおばあちゃん」というふうに言うんですね。お父さんとお母さんは、土日は疲れてぐったりしているなみたいな。そんなことを言いながら、それで55%とか50%だねみたいな話を、よくします。

海外の国からすると、これは、日本は先進国なのに、やっぱり低いって言われるんですよ。日本人は、体を動かしてない。スポーツしてない。

世界のフィットネスクラブ参加率というのがありまして、アメリカはフィットネス社会なので、通販のコマーシャルとか見ると、もう外に出ないで家の中で自転車こぐとか、家の中で誰にも見られずトレーニングするとか。いやいや、外行って走りゃいいのになんて思うんですけど、すごい、そういうフィットネス文化があります。アメリカは、国民の17.4%がフィットネスクラブに入ってる。日本は、3.3%。これは、低いから駄目っていう言い方は、もちろんしませんよ。いろんな事情があります。ただ、こういう現状がありますということですね。

それから、運動部活動の加入状況。これも、よく授業で使うデータなんですけども、中学校の男の子が、運動部活動に活動している70.8%。これが、高校生になると、57.5%になります。女の子で見ると、中学生の52.5%が、運動部活動していますが、高校生になると、27.4%になります。これも、授業で学生に、「なんで減ると思う？」って聞くと、「いや、勉強が忙しくなるからだだと思います」って言うので、「おまえたち、勉強してるの」って、聞いてちゃうんですけどね。部活動というところですけど、とにかく、女の子もスポーツ活動、減ってしまう。これ、子どもたちだけの

問題じゃないですよ。運動部活動そのものの問題だったり、学校の問題だったり、いろんな問題があります。ただ、これが現状だということ、何となく数字で見たいなと思います。

それから、国のいろんな世論調査があるんですけども。週に1回以上、運動スポーツ、実施できない。または、直近1年、運動しなかった理由の1番目は、仕事や家事が忙しい。忙しいんですけども、我々おじさんは、忙しいって言いながら、よく飲みに行ったりとか、お母さんはママ友とランチ行ったりとか、カラオケ行ったり、時間はあるんですよ。あるんですけど、これ、忙しいっていうのは、恐らく、優先順位が低いって言うだけだと思います。学生にもいるんですよ。部活やらない子は、「スポーツしてない」。「体動かしてない」って言うんですけど、ずっとスマホで遊んでるんですよ、空きコマとかで。「いやいや、走ってこいよ」って言うんですけど。だから、優先順位が低いんだって、私は思ってます。だから、優先順位を上げる努力をさせるのは、我々の仕事かなというふうに思っております。二つ目。面倒くさいっていうのも、これも何とかしなきゃいけない。それから、お金に余裕がない。どれだけお金をかけなきゃスポーツできないのになんていう感じはします。あと、年を取ったからっていうのを理由にするのは、ちょっと何か悲しいなって感じがします。

それから、次、運動スポーツが嫌いな理由の1番目、苦手だから。これ、苦手だからスポーツが嫌いになるっていうのは、悲しいですよ。私の家族で、昔、よくカラオケ一緒に行ってたんですけど、もう、「パパは音痴だ」って言われるんですよ。こっちは気持ちよく歌ってるのに、音痴って言われると、じゃあいいよって。ママと2人で行っておいで、みたいになって、もう、今は行きません、一緒に。苦手だから嫌いになりました。それから、疲れるからっていうのも、どうですかね。心地よく疲れるのがスポーツなんで、スポーツの楽しさ、良さがなかなか理解されていないんだなっていうふうに思います。時間を取られるから。これも、一緒ですね。優先順位が何となく上がらないんだな。それから、お金がかかる。お金がかからないスポーツのやり

方もあるのになと思うんですけども、こういうふう理解されてるということですね。

なので、私どもの目標というのは、スポーツのハードルを下げることなんです。例えば、皆さんのスポーツというのは、八村君とか、フェルプスだとか、ルーニーのオーバーヘッドみたいな。これ、皆さんの、多分、スポーツのイメージ。だから、ユニホーム着てピッチに立ってオーバーヘッドしないと、スポーツじゃないというふうに、多分、そう理解されてる方。ダンクができないとスポーツじゃないみたいに、多分、理解してるんだなというふうに思うんですけども。

でも、最近、ノルディックウォークだって、私からするとスポーツだし、グランドゴルフもそうです。ゲートボールはルール上、下手な人が入ると試合に勝てないから、高齢者が仲間外れされるみたいな、ちょっと悲しいこともあるんですけども、グランドゴルフは個人でも楽しめますので、これも十分、スポーツです。それから、ラジオ体操をみんなで作るんだって、これも十分スポーツだと思うんですよ。朝、ラジカセ持ってきて、地域でラジオ体操やってるおじさんたち。私も朝、散歩して行くと、何だこの若造みたいに見られちゃうので、すみません、10年後に来ますって言って、ちょっとまだ我慢してるんですけど。私も、あと十数年たって定年退職したら、行きたいなというふうに思っています。だから、もしかすると、これもスポーツだって私は言っていると思うんですね。

だから、これも言ってみればスポーツ。最近、スポーツ庁が、ご存じですかね。スニーカー履いて通勤するとか、エレベーター使わずに階段上れとか。スポーツ庁長官、水泳出身の鈴木大地さん。千葉の方ですけども。そういうことやってます。私、今日、ちょっと黒い服なので、黒の革靴履いてますけど、普段は、茶色のなんちゃって革靴ですね。レザーニーカーっていうのを履いて、いくらでも歩ける。我々おじさん世代からすると、スニーカーはちょっとなって思っちゃうので、見た目、何となくインチキくさいやつを履いて歩くっていうふうに、私はしてます。通勤もそうですね。これ、頑張って、グッと見えないように、アイソメトリックでつかまると上腕二頭筋のトレーニングになるとか。

ちょっと頑張ってつかまらないでつま先立ちして、ふくらはぎと体幹のトレーニングになるかなんて考えながら、私も電車に乗っちゃうんですけど。ただ、いろんな工夫はできるのになというふうに思います。

それから、世論調査でさらに、ボランティアを行ったという調査、10.6%なんですよね。100人に10人か、10人に1人か。ここでまた聞いてもいいんですけど、どうですかね。ボランティアっていうのは、特殊なものっていうふうに、ハードルの高いイメージがすごくあるんですよ。これを、私、何とかしたいって思ってます。それから、運動が大切かって聞くと、約73%が大切だって答えられます。スポーツがもたらす価値、健康体力の保持増進とか、人々の交流とか、精神的な充足感というふうに答えてくださっているの、何とかハードルをもっともっと下げていきたいなと思ってます。そしてその生涯スポーツを支えるには、地域スポーツが重要なな思ってます。そんな生涯スポーツ社会を実現するには、身近に、気軽に、手軽に参加できるスポーツ環境が重要だと思ってます。なので、地域スポーツ環境の充実が不可欠だと。

国の施策としましては、2000年のスポーツ振興基本計画で、2010年までに、もう随分前に終わった計画ですけども、全国の各市町村に、少なくとも一つは総合型クラブを作ろうとしています。総合型クラブっていうのは、いわゆる民間のフィットネスクラブではなくて、例えば、スポーツ少年団とか、ちびっこ野球とかママさんバレーみたいなものを、もうちょっと拡大して、多種目で、多世代で、多志向で地域住民が自主的に運営できる、そういうクラブのことを指しています。実は、千葉が全国的に見ると、総合型クラブの普及率でいくと、全国でワースト1、2、3位を、大体、毎年争っているという感じなんですよね。ただ、それが悪いっていう意味では、もちろんないんですよ。いろんな事情があるので。総合型クラブがたくさんあれば、スポーツ実施率が上がるかという、全国に今、3,599のクラブがあって、クラブ会員は130万人。130万人、すげえなと思うんですけど、これ、実は人口の1%程度なんですよね。そうすると、スポーツ実施率を50%、60%、70%に上げるとしても、全然、社会インフラにまだまだな

り得てないっていうのが、現状だと、私は、思っています。だから、作るなら総合型クラブを、もう、10倍、100倍作らなきゃいけないし、そうでなければ、スポーツのハードルを下げて、スポーツ実施率をもっと上げたいなというふうに思います。

私の願いとしては、地域スポーツの最小単位というのは、ファミリースポーツとか、これ言うと、いやいや、俺は独身なんだとかって怒られるかもしれない。ファミリー的。仲間と楽しめる、ファミリー的スポーツであってほしいというのが、私の願いです。それから、将来トップアスリートになることだけが目的とか目標じゃないスポーツの楽しみ方があっていいかなというふうに、私は思っています。私も小さい頃は、「オリンピック出たい」とか言ってましたが、全然、そんな実力はなくて、4流、5流で終わってしまいましたけど、スポーツは楽しめてきました。

いつも、あちこちで提案してて、なかなか実現しないのが、中学校、高校に運動部っていうのがあるんですけども、運動部の延長で、いわゆる高校総体でない種目を楽しむ部っていうのがあるのもいいなと思っていて、大学にはレクリエーション部っていうのいっぱいあるんですけど、残念ながら、中学、高校にレクリエーション部ってないんですよ。中学、高校の部活でドロップアウトした子が、大学に来てレクリエーション部へ入ってケースは多いんですけど、それ、もっと中学、高校でやっていいんじゃないのって言うんですけど、それやってもインターハイに行けないから。いやいや、そうじゃないって、また議論になるんですけど。

それから、体力を向上させたいという子がいてもいいと思うんですよ。普段、塾に行って忙しいから、週2回だけトレーニングして、体力高めたいっていう部活があってもいいし、もっと言うと、昔遊び復活しようって言って、めんこやったり、ビー玉やったり、竹馬やったり。いろんな体を動かす部活動があれば、もっと部活入って、もっと学校で友達と楽しくスポーツしたいって子が増えるんじゃないかなって、私は考えています。

これは、千葉市内にある、あちこちの公園。私がよく子どもたちと一緒に連れて行って遊んでた写真です。左上の一番高い所に登って

いるのがうちの子で、何とかすぐ上に登っていくんですけど、張り切って登ってました。あと、これ小さい頃ですけども、ちょっと大きくなったらプール行ったり、ローラースケートやったり、一輪車やったり、縄跳びやったり、いろんなことをして遊んできました。子どもたち一輪車やって、私、一輪車乗れなかったんで、去年、大学の体育の授業で、俺も一輪車やるって言って、15週の授業のうち、10週ぐらいで乗れましたね。自信付きました。10週ぐらい頑張れば、乗れますよ、皆さん。大丈夫です。生涯スポーツですね。

それから、たくましい中国の方々ということで。これ、いろんなバイアスなしで、ちょっと見ていただきたいんですけども、中国に調査で行ったときに、中国の方に、「中国の人は、本当に、朝から太極拳してんの」って聞いたんですよ。「何言ってます、やってますよ」って言われ、これ、朝の5時ぐらいなんですかね。朝、5時ぐらいに行くと、公園で太極拳してるんですけども、ちょっと、我々の発想と違っていて、教える人がいて、教わる人がいて、太極拳やってるんじゃないって、誰かがやり始めると、周りに人が集まって、みんなでやってるっていうのが、太極拳なんですよ。もっと言うと、いろんな流派とか派閥があるらしくて、あちこちにそういう人たちがいるんです。こっちは白のサテンの、同じ、これを着ている人がいたり。こっちなんか、ピンクの同じコスチュームの人がいて、こっちはターコイズブルーの人がいたりとかっていう感じでやってるんですよ。だから、教える、教わるじゃないんです。誰かがやっている。ラジオ体操もそれに近いんです。ラジオ体操は、張り切って前に出たくなる方、いらっしやるじゃないですか。ちょっと発想違うんですけども、こんな感じです。太極拳だけじゃなくて、昔の、我々おじさんですけど、竹の子族じゃないんですけど、ラジカセ置いて音楽ガンガンかけて、なんか分かんないけど踊ってるおばさま方もいましたね。

だから、本当に自由ですよ。こうやって、みんなで朝から体動かしているっていうのは。私、すごい衝撃を受けて、総合型クラブだとか何とか言っただけ、何か整備されないとスポーツができないっていうのは、甘えてるよな、俺たちっていうふうに感じましたね。10年ぐ

らい前ですけど。しかも、どっかから太鼓は持ってくるわ、笛は持ってくるわ、何か始まったんですよね。「今日、これ、お祭りなの」って聞いたら、「何言ってるの。今日は平日の朝ですよ」って言う、これが、平日の朝なんです。平日の朝に、公園に、この格好で集まってきて、踊ってるんですよ。しかも、楽しそうなんですよ、皆さん。これが、中国の人々の日常の朝のなんです。この後、向こうの方ってあまり食事作らないので、屋台で朝ご飯食べて、そのまま出勤するっていうんですよ。はあ？って。ちょっと、ショックを受けて帰ってきました。いろんな意味で。

それから、小さい公園にもこういう遊具みたいなのがあって、子どもの遊具かなと思ったら、右上の高齢の方、見ていただくと分かるんですけど、サイズが大人用なんですよ。大人向けのこういう遊具がいっぱいあって、これ、おじいちゃんが座ってますけど、本当は座って回したりする道具なんです。当時、胡錦濤さんが国家主席の頃に、こういう遊具使って、皆さん健康になりなさいって、看板もセットで全部、あちこちに配置されてる。これ、国策で実施されてるらしいです。これも見ていただくと、大人の方が雲梯していて、大人サイズなんですよ。これは垂直跳び。自分で測れるかと思うんですけど、こんなに跳ぶんだ。すげえな、さすが中国の人。ちょっと分かんないんですけど。それから、これもそうですね。つり輪ですけど、これも子どもサイズじゃないですよ。こういうものがあれば、大人も運動ができる。

向こうはちょっと、日本と、アメリカもそうですけど、保険制度が違うんで、自分で自分の体を守るっていうことで、こういうことやらなきゃいけないというのもあるかなって。日本でも、仕事前にひと遊びしてから出勤しようっていう動きは、いろいろ出てまして、早朝に活動して出勤するっていう、こういうのも、よく取り上げられていますので、時間とかお金とか、もう既にいろいろ工夫されているなっていうふうに思います。

オリ・パラの話が出ると、オリ・パラに向けて何をやるのかっていう話が多くなるんですけど、私の立場からすると、オリ・パラを超えてどうするかっていうことを、少しお話したいなと思います。オリ・パラを通じて、

さらに超えて、スポーツをする、見る、支える楽しさをもっと知ってほしいというのが、私のスポーツ計画としての立場です。オリ・パラで終わりみたいな。オリ・パラで盛り上がりがいんじゃないかみたいな、そうした雰囲気はちょっとあるので、その先をぜひ、見越していただきたいなと思っています。

みんなで作るっていうキーワードもいただきましたので、千葉でこれだけいろんな種目が開催されることを私は、すごい誇りに思っていて、ぜひ、皆さんも誇りにしてほしいと思います。スポーツ大好き人間は、ぜひ、スポーツ観戦を思いっきり楽しんでいただきたいし、スポーツに特に思い入れがない人っていうの、周りにいらっしやと思うんですね。さっきの高橋さんの話じゃないですけど、2人に何とか伝えて、仲間を何とか増やしてって。私は、できればスポーツ大好き人間が、スポーツなんかという人をぜひ連れて行く。まず、いいから一緒に行こうよって行って、仲間を増やしてほしいなって、私は思ってます。

特に、ボランティアっていうことを一つのキーワードに、楽しさを見つけていただきたいなと思っています。競技ボランティアは、特定の競技のものなので、大会が終われば思い出で終わっちゃいますが、おもてなしボランティアに関しては、大会が終わっても、その地域のおもてなしという意味で、いろんな場面で活躍できるかなと思っています。一つ、ボランティアと思われてないのが、観戦するっていうのも応援という意味ではボランティアだって私は思ってます。何か特殊なことをしないとボランティアじゃないって思われるんですけども、チケットを買って現場に行って応援する。それを自分が今、できるボランティアだって、ぜひ思っていたきたいなって思っています。だから、興味がないから行かない、興味がないから買わないじゃなくて、応援に行くことで、何か自分が関われるんだっていう、そういう気持ちになってほしいなと思っています。

私がよく、これ、授業で使う、私のボランティアのイメージなんですよ。「これ、何だと思う」って学生に聞くと、「アンパンマン」としか言ってくれないんですけど、僕のアンパン闘争っていうのが私のボランティアのイメージです。僕のアンパンのイメージっていう

のは何かって言うと、僕の持ってるちょっとした時間、僕の持ってるちょっとした技能、僕の持ってるちょっとした経験、僕の持ってるちょっとしただけの体力。これをちょっとだけ提供するのが、私はボランティアだと思っています。だから、あげすぎると、ちょっとこうなっちゃうんですけど。ジャムおじさんに次のアンパンもらわなきゃいけないんですが、ちょっとでいいと思うんですよね。自分のアンパン全部あげるの必要なくて、だから、ちょっと提供できる。それだけでボランティアになるのになってというふうに、私は、いつも考えています。

ですので、生涯スポーツの実践について、今、する、見る、支えるを含めて、実践につなげていただきたいですし、生涯スポーツを実践するのに、ぜひ、仲間を作っていただきたいし、増やしていただきたいなというふうに思っています。ぜひ、千葉。千葉の話。千葉のよさを再確認していただきたいなと思っていて、スポーツをするような場所がないって言う方多いんですけども、実は、知らないだけで、たくさん環境はあるんですよね。それは、知らないだけだと思います。この話をしだすとキリがないので、具体的な中身の話はしませんが、たくさんあります。見るっていうことも、プロスポーツにはたくさんありますので、見る。千葉は、すごい豊富だと思いますよ。野球、サッカー、バスケ。他にもいろいろ見れるスポーツあります。

それから、スポーツを支えるっていう意味でも、ビッグスポーツイベント含めた身近なボランティアの機会っていうのは、実は、たくさんあるんですよね。この後、敬愛大の事例も出ると思いますが、私の周りの学生も、私が連れてって、いろんな県内、市内のボランティアに駆り出しています。ぜひ、スポーツが楽しめる千葉を目指していきたいと、私は思っております。できれば、市民の自主性を担保する。これは前提にあるということの上で、スポーツ団体の役割をもうちょっと明確にしていきたいと思いますし、企業や行政にも、いろんな支援をしていただきたい。支援というと、一般的に、経営支援、人、物、金、情報と、それぞれの得意な分野で、ぜひ支援していただきたいですし、スポーツサービスも、これもちょっと専門用語になるんで

すけど、エリアサービス、プログラムサービス、クラブサービス、ネットワークサービス。いろんな支援をいろんな方々をお願いしながら、市民の自主性を何とか駆り立てていきたいなというふうに思っています。

スポーツボランティアを自己犠牲とか奉仕活動っていうふうに考えている方、多いんですけども、私は、スポーツの新しい楽しみ方だなと思っています。これは、今のZOZOマリンでうちの学生がボランティアで行ったときのもので、子どもたちに絵本読み聞かせボランティアがあって、試合見てて飽きる子どもたちを集めて、絵本読んであげる。これもボランティアで、こういうこともたくさんやってるんですよね。ぜひ、いろんな所に参加してほしい。スポーツボランティアは、明るく楽しく、自分も元気になれるようなボランティアだと、私は思っています。

私、経営学専門なので、スポーツボランティアやっていると、「先生、どんな論文書いてるんですか」って言われるんですけど、スポーツボランティア、私にとってはどっちかっていうと趣味であって、研究は研究で、また全然違う経営学の分野の研究が専門なので、ボランティアは趣味です。あちこち行って、ボランティアしてます。大学のホームページに、学生がいろいろ活動してくれると、できるだけ、情報を提供するようにしています。

今、1枚だけ、これ、出しましたけど、去年の12月ですね。ZOZOマリンでやっている、「サンスポ千葉マリンマラソン」っていうのが、毎年開催されています。市役所の方から、いわゆる視覚障害。熊谷市長の発案だと思うんですけども、健常者のマラソンだけじゃなくて、視覚障害の方もエントリーさせたいと。それも、いわゆるブラインドランナーですね。伴走者がいて、ガンガン走ってる人じゃなくて、普段は家に閉じこもったり、なかなか外に出ないような、そういう人たちを連れ出して、一緒に走る。外で遊ぶ楽しみを知ってほしいと。そういう方々には、いわゆる伴走者っていうのはいないので、先生、何とかありませんかって相談を受けて、じゃあ、一応、学生、ブラインドランナー、伴走者ができるような、ちょっとした研修をして、一緒に走りましょうと、去年、1年がかりで準備をし、去年の12月、ここで本学の学生が伴走ボラン

ティアと一緒に参加をしました。上位に入ると伴走ボランティアも、一緒に表彰されるんですよね。だから、これもたまたまなんですけど、上位の子の伴走した子は、一緒にメダルもらって喜んでいて、他の子はそれを見て、ああ、ちょっと残念ってのもあり、誰と伴走するかっていうのは、それはもうランナーもやってたんで、何とも言えないんですが、そういうことで、自分もメダルもらって、ボランティアをし、自分も一緒に表彰されるんだって、そういう喜びを感じて帰ってくれた学生もいました。本当は、ここだけです。100枚ぐらい、ダーッとやってるボランティア紹介したいんですけど、何かうちの大学の宣伝になっちゃうので、これだけ、ちょっと、千葉市と直接関わりのあるボランティアだったので、紹介をさせていただきました。

生涯スポーツ社会の実現に向けてということで、最初にもちょっと出したスライドです。スポーツが得意な人の生涯スポーツ。スポーツをしている人の生涯スポーツっていうふうに、まだまだ考えられてるんじゃないかなって思います。人見絹枝さんの時代から、やっと女性も楽しめる生涯スポーツというのが、実現しつつあります。障がい者も楽しめる生涯スポーツも、今回、このオリンピック・パラリンピックを契機に、もっともっと、いわゆるパラアスリートだけじゃなくて、日常的にスポーツができない障害のある子どもたち、障害のある方々が、日常的にスポーツができる、そういう場面も、もっともっと作っていききたいなと思います。

あと、年取ったらスポーツができないという思い込みには、高齢者でもできるスポーツを作ればいいんです。ルールを変えればいい。そういうふうに思ってますので、高齢者も楽しめる生涯スポーツ。フィットネスでガンガン汗流すとかじゃなく、もうちょっと楽しいスポーツあるのになんていうふうに、私は思っています。だから、私は個人的にフィットネスクラブ、あんまり好きじゃないんですけどって言うと怒られちゃうんで、あんまり言えないんですけど、あんまり好きじゃないんです。

それからもう一つ、苦手でも楽しめる生涯スポーツっていうのは、すごい大事なかなと思います。上手じゃないとばかにされるとか、

上手じゃないと恥ずかしいとか、そういうのを取っ払えるような、苦手だけど楽しい、苦手だけど一緒に楽しめる。そういう生涯スポーツ社会を、これから作っていかないといけないかなと思っています。

それから、時間がなくても楽しめるっていうのも、これからは重要なかなと思っています。私は大学の授業で学生と一緒に体を動かすので、「先生、体、週何回動かしてます？」って聞かれると、「週5かな」とか言っちゃうんですけど。時間をうまく作る努力とか工夫とかも大事かなと思います。

あと、お金がなくても楽しめるっていうのも、ちょっとこれから重要なキーワードかなと思います。それは、行政が丸抱えでお金を出してくれるっていう意味ではなくて、何か工夫をして、お金がなくても楽しめる、そういう生涯スポーツ社会を、千葉で、ぜひ作って、今回のオリンピック・パラリンピックを契機に、オリンピック・パラリンピックを越え、そういう生涯スポーツ社会を千葉で実現して、全国に、もっともっと先駆けていけたらなというふうに思います。

生涯スポーツとしてのスポーツボランティア、ちょっとイメージ変わっていただけでしょうか。応援に行くっていうことも、私はボランティアだと思ってますので、そういう意味で、スポーツボランティアをぜひ、千葉の文化にしていきなさいと思います。それから、生涯スポーツ社会を、千葉で、もっともっと普及させたい。週1回スポーツしている人が、7割、8割、9割になるような、そんな千葉に、私はしたいと思っています。いろんな場面でのいろんな方と関わって、1個ずつ、何とか実現をしつつはあるものもありますので、一緒にやっていたらなと思っています。

この業界にいますと、いろんな所で、またお会いすることもあると思いますので、どっかでお会いしたときには、また、あのときのあの話、聞いたよとか、あの話、つまんなかったよとか、お声掛けいただければと思います。この後、パネルディスカッションもありますので、また、何かあればそこでコメントさせていただきたいと思っています。ご清聴、ありがとうございました。